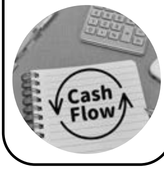
LESSON 1

まずは「キャッシュフロー計算書」が必要な理由を理解しておこう



決算書には、財務３表と呼ばれる３種類の書類があります。貸借対照表（Ｂ／Ｓ）、損益計算書（Ｐ／Ｌ）、キャッシュフロー計算書（Ｃ／Ｆ）です。このうち、キャッシュフロー計算書は中小企業では作成義務がないのでなじみが薄く、見たことがない、見方も分からないというお話を経営者や経理担当者の方からよく聞きます。

京セラ、ＫＤＤＩの創業者である稲盛和夫さんの著書、「稲盛和夫の実学」の中に、創業期の稲盛さんと経理の間でこのようなやりとりがあります。

今期は利益が出たので、経理部長に「儲かったお金はどこにあるのか？」と稲盛さんが聞くと、経理部長は、「利益は様々なものに姿を変えているので、どこにあるとは明確に言えない」と答えます。稲盛さんが「利益が出たから株主に配当しないといけないが、その金はどこにあるのか」と聞くと、「配当のための資金は銀行から借ります」との返答。「それは本当に儲かったと言えるのか？」と言うと、経理部長は、「それでも儲かったと言うのです」と答えます。

稲盛さんはこれがどうしても納得できなかった、なぜそのようなことになるのか、という話が出てきます。これはまさに会計とキャッシュの違いという、キャッシュフロー計算書が必要な本質の問題です。

「儲かったお金はどこにあるのか」「儲けた利益はどこに消えたか」が分からず悩んでいる経営者は世の中に本当にたくさんいます。この経営者の悩みに対して、経理担当者はキャッシュフロー計算書を使って、適切に説明する必要があります。

我々、古田土会計グループでは４０００社の顧問先に対して、１年に１回の決算後だけではなく、毎月必ず２種類のキャッシュフロー計算書を作成し、経営者にその内容について説明しています。実はそれほど会社の状況を知るために大事なものになります。

キャッシュフロー計算書は、数字がずらりと並んでおり、非常に読みにくい構成になっていますが、中小企業で見るべきポイントは限られています。本稿では重要ポイントに絞って、図表